

ブロンテ書簡研究（5）

岩 上 は る 子

（九）1842年

1842年2月8日早朝、シャーロットとエミリは父に付き添われてハワースを出発した。メアリ・テイラーとその兄ジョーゼフが加わって、一行は12日にロンドン・ブリッジ埠頭から乗船し、14時間の航海の後、同夜遅くオステンドに入港した。荷物が税関を抜けるのに更に2日を要し、ブリュッセルにたどり着いたのは14日の夕暮れであった。翌15日、ブロンテ師と娘たちは領事館付きの牧師ジェンキンズ夫妻の案内で、エジェ夫人の学校 Pensionnat Heger の門をくぐった。ハワースを出てから、ちょうど1週間目の朝だった。

最終目的地がパーンショナ・エジェとなったのは、出発間際であった。当初予定していたブリュッセルの学校の評判が芳しくないことがジェンキンズ夫人から知らされ、急遽フランス北部のリールの学校に変更になった。だが、その直後、夫人の推薦するブリュッセルのパーンショナ・エジェへの入学が決まったのである。校長のエジェ夫人（Claire Zoé Heger, 旧姓 Parent）は当時37歳で、5歳年下の夫（Constantin Georges Romain Heger）は隣接する男子校 Athénée Royal の教師であった。市内の「最も健康な地区」イザベラ通り32番地に位置するパーンショナ・エジェでは、通学生と寄宿生90名あまりが学んでいた。専任と非常勤の教師10名ほどが「フランス語、歴史、算数、地理、作文、および良家の子女に求められる針仕事」（学校案内より）を教えていた。ブロンテ姉妹は絵画、音楽、唱歌、作文、算数、ドイツ語、さらにエジェ氏から特別にフランス語の補習を受けた。授業料と寄宿費を合わせると、半期で二人分1050フラン（42ポンド）は要したと思われる。これは伯母が提供してくれた経費の範囲以内ではあったが、シャーロットのホワイト家での家庭教師の年俸が16ポンドであったことを考えると、非常な高額であることがわかる。

ベルギー人の十代の少女たちに混じって学ぶ24歳と25歳のイギリス人姉妹は、級友たちと打ち解けることはなかった。エジェ夫人の子どもたちの家庭教師兼子守のイギリス人女性をのぞけば、学校では唯一のプロテスタントであったことも、ふたりを孤立させる要因となった。だが市内のケークルベルグ校にはメアリとマーサ・テイラーが学んでいたし、その親戚のデイクソン家、父親の知り合いで留学に手を貸したジェンキンズ夫妻も在住していたので、姉妹は異国の地で孤立無援というわけではなかった。何より、彼女たちは日々の勉学に追われていた。少なくともシャーロットは学生としての身分に満足し、エミリも「馬のように頑張る」（エレン宛、5月付け）いた。なかでもエジェ氏によるフランス語の作文指導は、優れたエッセイや文学作品の一節を鑑賞した上で、その文体を真似て同じ主題で作文するというものであった。エジェ氏は文法や構文の間違い、不適切な言葉遣い、誤った翻訳を指摘するばかりでなく、論理的で簡潔な文章を書くよう指導した。手

本を模倣することから始めるこの方法を、独創性を重んじるエミリは嫌ったが、シャーロットは熱心にその指導に従った。（残存するふたりの作文30点がスウ・ロノフによって編集されている。Lonoff, Sue. *The Belgian Essays: Charlotte Brontë and Emily Brontë*. Yale University Press, 1996 を参照）。姉妹は言葉の障害（シャーロットはフランス語を多少読めたが、エミリはほとんどできなかった）を乗り越えて、勉学においてかなりの成果をあげた。予定の半期が修了する頃、シャーロットは滞在の延長を決めている。7月付けのエレンへの手紙では、シャーロットが英語を、エミリが音楽を教えることで宿舎費を免除するというエジェ夫人の申し出があったことを伝えているが、実際にはシャーロット自身の発案であった。（Juliet Barker, *The Brontës*, Phoenix Giant, London, 1995, p.394）

一方、ハワースではブランウェルが帰宅していた。ラデンデンフットの駅長であった彼は、11ポンド余りの収支欠損の責任を問われ、1842年3月4日付けでリーズ・マンチェスター鉄道を解雇されたのである。だが、この件に関して親友フランシス・グランディに書き送った5月22日付けの文面から感じられるほど、ブランウェルが落胆していたとは考えにくい（Barker, p.398）。41年4月に駅長に昇格したブランウェルであったが、自作の詩 'Heaven and Earth' が地元新聞 *Halifax Guardian* 1841年6月5日号に掲載された（ブロンテ姉妹のなかで、自分の作品を最初に活字にしたのはブランウェルであった）のを皮切りに、詩人としての彼にチャンスが巡ってきていた。42年に入ってからには更に活路が開け、リーズ・マンチェスターの解雇後一月も経たない頃には、創刊されたばかりの *Bradford Herald*, 続いて *Leeds Intelligencer* に矢継ぎ早に彼の詩が掲載された。だが文学で身を立てることがいかに困難であるかを過去の経験から知っていたブランウェルは、その一方で、鉄道会社への再就職について友人グランディに打診している（5月22日付け）。しかし仕事は見つからなかった。9月6日、ブランウェルは最新作 'Sir Henry Tunstall' をブラックウッズ・マガジン社に送って批評をあおいだ。だが、今度も出版社から返事はなかった。

ブランウェルにとってより衝撃的であったのは、牧師補ウィリアム・ウェイトマンがコレラに倒れ（9月6日に死去）、さらに2ヵ月を経ずして「20年もの間、僕の母親であった」（10月25日付け、フランシス・グランディ宛）ブランウェル伯母が他界（10月29日）したことであった。シャーロットとエミリはまだブリュッセルにいて、アンもソーブ・グリーン家のロビンソン家から戻らなかった。ブランウェルはウェイトマンの時と同じように、死の床にある伯母に付き添い、「自分の最大の敵にさえ味をさせたくないような激しい苦しみを二晩も見つづける」（10月29日付け、フランシス・グランディ宛）ことになる。

シャーロットとエミリの元へ伯母危篤の知らせが届いたのは11月2日で、翌日には死亡の知らせが入った。ふたりは6日にアントワープで船に乗り、ハワースに帰り着いたのは8日であった。すでに葬儀など一切が済んでいた。この経緯を述べたエレンへの手紙（11月10日付け）には、さらにもうひとつの死が伝えられている。それは親友メアリ・テイラーの妹マーサの病死である。姉とともにケーケルベルグで学んでいたマーサはコレラにかかり、知らせを受けてシャーロットが駆けつけたときはすでに遅く、前夜10月12日に死亡していた。23歳であった。葬儀は14日に市内のプロテスタント教会チャペル・ロウヤールでひっそりと行われた。

シャーロットが携えてきたエジェ氏の手紙は、ブロンテ家の娘たちの勉学の成果を賞賛し、もうしばらく最後の仕上げをすることを強く勧めている。初めからブリュッセルに戻るつもりであったシャーロットには、この手紙は父親たちを説得するには十分な材料であった。伯母が4人の姪たち（ブロンテ姉妹の他にペンザンスに一人いた）に遺してくれた遺産は一人当たり300ポンドあり、当面、経済的な心配はなかった。

〔1842年1月10日?〕

ハワース

愛するエレン

この手紙を受け取りしだい、ハワースに来られる日を決めて、ただちにお知らせください。わたしはクリスマス・イブにこちらに戻りました。ご主人たち¹⁾とお別れの場面は、それまでの様々な辛い思い出をぬぐい去って余りあるものでした。それにしてもこの半年間、かれらはじつに良くしてくださいました。アンはあの難しい状況にあっても、かけがえのない人として受け入れられ、たとえわずかの間でもなんとか戻ってもらえないかと請われています。もし家事をまかせられる良い家政婦が見つければ、アンはたぶん帰るでしょう²⁾。40歳から50歳くらいで、性格のよい、きれいな好きな、正直な人が欲しいのですが。ブリュッセルのことは、おいでの節にお話しします。ウェイトマンさんはまだこちらにおられます。まったくお変わりありません。おふたりが再会する場面をぜひ見たいです。彼はまたすっかり恋に落ちることでしょう、まちがいなく。来てください。

1) ホワイト家 (the Whites) シャーロットは1841年3月から同家の家庭教師を務めていた。1841年3月3日(?) 付け、エレン宛書簡、および注1を参照。

2) アンは1840年8月からソープ・グリーンのエドモンド・ロビンソン牧師 (Rvd Edmund Robinson) の娘たちの家庭教師をしていた。1841年7月には勤務先を変えることを強く希望していたが、ロビンソン家に帰ることを承諾した。

〔1842年1月20日〕

〔ハワース〕

愛するエレン

おうちの方々がハワース訪問をお許しにならない理由に立ち入るわけにはいきませんが、現在の状況では——そして今後どのくらいになるか見当もつきませんが、おそらくこちらからブルックロイドに伺うのは難しいように思います——したがって収支バランスは、それほど不均衡にはならないでしょう。

3週間以内にイギリスを発つ予定です¹⁾——でも、その日がはっきりいつになるか、目下のところ未定です。というのも現在ロンドンに滞在中のフランス人のマージアル夫人が、わたしたちに付き添ってくださることになり、出発はその方のご都合しだいなのです。目的地が変更になりました。ジェンキンスさんが、というよりも彼の奥さまが父にくださったお便りでは、ブリュッセルにあるフランス語学校の評判は芳しくなく——多くの点で二流とありました——重ねて問い合わせたところ、バプティスト派のノエル牧師さまたちが、北フランスのリールという所にある学校をご紹介くださいました。かくしてそこがわたしたちの目的地になったというわけです。経費は寄宿費とフランス語の授業料だけで一人当たり50ポンドです。でもこれだけ出せば、個室を与えられます。こんな贅沢をしなければもう少し安上がりなのですが——おばさまがお優しくも追加料金を認めてくださったのです——何かにつけて、その特典をありがたく思うことになるでしょう。ブリュッセルからリールに変更になったのはいろいろ残念で、なかでもマーサ・テイラーに会えないのが痛手です。メアリはほんとうに親切に、あれこれと情報を提供してくれました——最後まで労を惜まず、また出費も厭いませんでした——ルビーにも勝る宝です。あなたとよいメアリと

いい、わたしはほんとうに良い友人に恵まれています。ふたりの真心は聖書と同じように信じて疑いません。おふたり——とりわけあなた——にはご迷惑のかけ通しでした——今もこうして——でもあなたはいつでもいやな顔ひとつなさらず、その心の広さに頭の下がる思いです。

このところブリュッセル、リール、ロンドンへと数え切れないほど手紙を書き、おまけに服は繕わねばならない——他にもシュミーズやナイト・ガウン、さらにハンカチ、ポケットなどたくさん縫わなければなりません。こちらに帰ってから毎週、ブランウエルの帰りを待っているのですが、彼はいっこうに帰れません²⁾——今度の土曜日には会えるかと期待しているところです。こんな状態ですから、どうして訪問などできましようか。

トルソン夫人がまた打診してきました。年俸40ポンド払うと言っています。この件についてのミス・ウースウエイト³⁾の手紙を同封します。ご本人にお返し願えませんか——もちろんわたしは行けません。

エレン、暖炉のそばで語り合いたいとか、毛布にくるまってお話ししましょう、なんていうあなたの言葉に、わたしは激しく心乱されます。自分の顔に老いの兆しを見つけました。今度お目にかかるときは、きっと帽子をかぶって、眼鏡をかけていることでしょう。

長いお便りをください。ヴィンセントさん⁴⁾のことも誰のことも構いません。思ったことを何でも書きつらねて欲しいのです。あなたの大切な「お若い牧師さま」⁵⁾は、お顔の色が冴えず病気がちです——気の毒に思いませんか。わたしはかわいそうでなりません——お元気で陽気でいらしたときは気にもかけませんでした——お加減がすぐれないのを見ると、いつも同情してしまいます——教会ではアンの真向いにすわって、そっとため息をつきながら、横目であの娘の気を引こうとされます——アンはといえば、ただじっと目を伏せたままで——ふたりはまるで絵のようです——あの方もあなたのような奥様をお持ちになれば、きっと落ち着くでしょうに。あなたなら彼をしっかりと繋ぎとめておけると思うのです——ほかの方ではだめなのです。

かしこ

1)最終的にブリュッセルに向けてロンドンを出発したのは2月12日になった。

2)ブランウエルは1841年4月からラデンデンフットの駅長に昇格し、駅から半マイルほど離れた Breary Hall(家主は James Clayton)に下宿していた。(Barker, p.367)

3)Miss Outhwaite アン・ブロンテの名付け親。

4)エレンは以前にヴィンセント (Revd Osman Parke Vincent ?1813-85) の求婚を断っていた。1840年4月30日付けのエレン宛の手紙を参照。

5)ハワース教会の牧師補 William Weightman のこと。

メアリ、マーサ・テイラーとシャーロット・ブロンテからエレン・ナッシーへ

〔1842年3月－4月〕

〔ブリュッセル・3月〕

愛するエレン

やらなければならないことばかりで、あなたにお便りするのを忘れたなんて思わないでね。一日おきにブルックロイドに出かけるわけにはいかなかったように、そう度々はお便りできないわ。ミス・ブロンテとはこちらに来てからは会っていません。だから'自分'が好きのようにだけ過ごしているわけでないことはおわかりでしょ。朝食の前に絵、朝食が済んだら、たとえばドイツ語の練習

と絵、夕食後は散歩、ドイツ語、絵、そしてときには9時頃、くたくたになって誰と話すでもなく寝てしまいます。日曜日でもなければ、お便りなんかできません。幸い雨が激しくて教会に行けないので、いろんなことをする時間ができたわ。仕事を並べてみると、フランス語の作文を忘れていたわ。これがケーケルベルグの学校の災厄です。「シュクダイハ、スندگان」「エエ、デモマダデキナイノ——始まりの部分が」「テツダツテクレル」静かに！「招待する」ってフランス語で何て言うの？8時間よ！いつになったらお茶になるの？あなたは何時間するの？フランス人の女の子が英語を話すと、こうなります。ドイツ人も同じように二つの言語をごちゃ混ぜにします。最悪なのがドイツ人の先生です。わたしたちの先生のことを話さなくては。ミス・エヴァンズは高い教育を受けたイギリス人女性で、フランスに来て8年になります。あそこまでばか丁寧でなければ、わたしだって好きになるのだけれど、あんまり丁寧すぎて時々、偽善者なんじゃないかって思っています。音楽の先生のマダム・フェルディナンドは小柄でやせっぽちで、色黒の話好きのフランス人女性です。彼女の夫は背の高い肩幅の広い男で、とてつもなく大きな口をしています。彼がたえず生徒たちに言うのは、声が出ていく穴は実に小さい、しかもその道をさえぎる舌もあれば歯もある、だから口はぜひと、できるだけ大きく開くべきであると。

それからムッシュ・ゴウヌという色黒のフランス人の小男です。顔に歴史と書いてあって、それがまた風変わりなの——顔も歴史も——あなたは面白がるでしょう。彼は自分の国の文学によく通じていて、変な英語を少し話します。よい先生だと思えます。絵の先生のムッシュ・ウアーはいくらか才能があって、眼識はすばらしく、教え方は知的です。安煙草の臭いをあんなにさせなければ、先生のことを好きになるのに。最後に、そしてどうでもいいのがムッシュ・セクレです。良識がないように思えるからというより、ダンスの先生なのだから、形式を知らないなんてことがあってはいけないのですが——フランスの子犬のような欠点を持ち、彼と話すときはただ「はい、先生。いいえ、先生」とだけ言っていなさい、というのが一番の助言です。マーサはおかげでだいぶ良くなりました。わたしは足が伸ばせません——「モットノバシナサイ、モット」けれど私たちのぶざまな姿も、右の脚と左の脚が区別できず、おまけに頑として口を開けたまま踊るベルギー人の女の子のおかげで影が薄くなります。それからムッシュ・イサーという、裏手の教室で何人かの女の子に体操を教えている教師がいます。それに地球儀を教えている、身振りの多い不潔でにやけたベルギー人教師を忘れるところでした。彼はそっちゅう「さあ、いいですか。わかりますね」と言うものだから、「いいですか先生」とか「地球儀先生」なんてあだ名をつけられています。こんな騒々しくて落ちつかない学校で、わたしたちは勉強する——その気があれば——あらゆる機会を与えられています。フランス語は例外と言わざるを得ません。先生がいないので、ほとんど上達しないのです。学校にはフランス人よりもイギリス人やドイツ人の女の子の方が多くて、フランス語はほんのわずかしが使われなくて、しかもそのわずかのフランス語もまちがっているのです。ブロンテさんたちに会うまでは、お便りはしないつもりです。

1842年3月26日

メアリ・テイラーが自分の手紙の裏に、一言あなたに書いたらと言ってくれます。リールではなくブリュッセルに落ち着いたことは、お聞き及びと思います。よかったです——学校もすばらしく——きわめて快適です。今はケーケルベルグにメアリとマーサを訪ねて、楽しい一日を過ごしているところです。見知らぬ人たちのなかで冷えきった心を少し暖めなおす必要がありますので。あなたのことを忘れるなんて、ご懸念にはおよびません。そのうちに改めてお便りし、わたしたち

の様子やまわりのひとたちのことなど、お伝えするつもりです。メアリもマーサも変わりありません。ふたりが変わるはずのないことは、カトリック教徒のように信じて疑いません。さようなら、お母さまとマーシーによろしく。エレン、なるべく早くお便りください。

1842年4月4日

愛するエレン

そのうちにお手元に届くでしょうけど、何時になるかわからないので、この記事に少し付け加えておくわ。ここ10日間はお休みだったので、どうしてもまた勉強を始める気になれないの。果てしないドイツ語にうんざりして、明後日に新しいフランス語の先生が来るのが待ち遠しいです。そうしたらフランス語が続けられるから。ジョー兄さんがブルックロイドでごいっしょにお茶を飲んだジェンキンズさんのいところが、私たちのところに滞在する予定なの。カササギのようにおしゃべりするでしょう。彼女のいところが7月以前にブリュッセルに来るとというのが本当ならいいのだけれど。向いに座っているメアリが虎のように厳めしい顔をして、ドイツ語の辞書と睨めっこしています。ここにはとても可愛くてお淑やかで、優雅な女性がいて、わたしたちの'竜'を飼い慣らしにかかってくれました。実際、その手綱さばきで、いくらか大人しくなりつつあります。あなた、フランス語とドイツ語で頭をがんがんさせたい？わたしが少しばかり妙ちくりんな英語を書いても、大目に見てくれなくちゃだめよ。外国語を学ぼうとしているうちに、ただでさえよくわかっていない自国語までほとんど忘れてしまいました。

お祈りに行かなければならないようなので、片づけなくちゃ。でも別の日に、もう少し書くわ。

マーサ・テイラー

あなたが忘れられてしまったと思うといけないので、最初の機会をとらえて手紙を書きます。元気を出してね。海峡を越える日を——いつの日か——楽しみにして下さい。私の兄たちに頼んで、とくにお母さんの様子や、他に何でもいいから書いてちょうだい。

42年4月5日　メアリ・テイラー

それからわたしが知っている人たちのニュースも教えてね。紳士のお化粧が流行しています。ジョージに化粧品を送りましょうか。ジョー兄さんに会ったら、わたしの代わりに彼の髪を思いっきり引っ張って、ジョンをぎゅっと抓ってやってちょうだい。

お母さまとお姉さまたちによろしく、変わらぬマーサ・テイラー

[1842年5月]

ブリュッセル

愛するエレン

近ごろでは、外国にいる友だちに、手紙の代わりに何も書いていない便箋を送るのが流行しているようです。

1、2週間ほど前に26歳になりました。そしてその人生の盛りに——わたしは女生徒——まったくの女生徒というわけですが、おおむねその身分を楽しんでいます。権威を行使するのではなく、それに服従する——命令を下すかわりに、それに従う——ことは、はじめはかなり奇妙な感じでしたが、今ではそうした状況を気に入っています。まるで長いこと干し草しか与えられていなかった

た牛が、青々とした牧草をむさぼるような、そんな貪欲な気持ちです。こんな喩えを笑わないでください。命令するより服従するほうが、わたしにはずっと性にあっていてるのです。

学校の規模は大きく、40名ほどの通学生と12名の寄宿生がいます。校長のエジェ夫人¹⁾は、ものの考え方、教養程度、性格などキャスリン・ウラー先生²⁾によく似ていらっしやいます。いくらか角がとれているのは、夫人が失望を味わされたことがないので気むずかしくないということなのでしょう。一言でいえば、独身女性ではなく既婚女性ということです。マドモアゼル・ブランシュ、マドモアゼル・リフィ、マドモアゼル・マリーの3名の教師がいます。はじめのふたりはこれといった個性もなく、ひとりはおールド・ミスで、もうひとりもそうなりつつあります。マドモアゼル・マリーは才能もあり独創的ですが、横柄な態度が人の反感をかい、わたしとエミリ以外からは学校中で嫌われています。男性教師は7人ぐらいい、いろいろな科目——フランス語、絵画、音楽、歌唱、作文、算数、ドイツ語など——を教えています。

学校ではわたしたちと、もうひとりの少女、それから夫人の子供たちの家庭教師——小間使いと保母兼家庭教師の中間のような立場——のイギリス人女性をのぞくと、周りじゅうみなカトリック教徒です。国と宗教の違いが、わたしたちと周囲の人たちとの間に、はっきりと境界を作っています。多数のなかにあつて、わたしたちは孤立しています。でもけっして不幸ではありません。現在の生活はとても楽しく、家庭教師よりはるかにわたしに向いています。時間はいつもふさがっていて、瞬く間に過ぎてしまいます。これまでのところ、エミリもわたしも元気に頑張っています。まだお話していない方がひとりありました——ご主人のエジェ氏³⁾のことです。修辞学の先生で、大変な博学ですが、ひどい癩癩もちで、色黒の小柄な醜男で、表情が様々に変わります。ときには狂った雄猫、ときには興奮したハイエナといったぐあいで、かと思えばきわめて稀なことですが、そんな危険な力で引っ張るのではなく、あなたのいう穏やかな紳士に近い物腰をなさることもあります。今はわたしのことをカンカンに怒っていらっしやいます。先生に言わせれば、わたしが「ほとんどでたらめ」な訳をしたものですから。実はそれほど間違っていないのですが、それをお読みになったときに、殊の外ご機嫌斜めだったからなのです。彼は面と向かっては言わず、ノートの余白に非難の言葉を書きなぐります。短い辛辣な文句で、いつも作文のほうが訳文より優れているのはどういうわけかと問い詰め、さらに実に不可解だと付け加えます。実を言えば、2、3週間前に、おそろしく難解な英語の文章をフランス語に直すのに、気まぐれな先生がわたしに辞書も文法書も使ってはならないと命じたのです。このため難渋して、ときおり英語を使わざるをえず、それが目に止まって怒りが爆発したというわけなのです。

エミリと彼とはどうも相性が悪いようです。彼があまりにも酷いときには、わたしは泣きだします。それで事はおさまります。

エミリは馬のように奮闘しています。彼女には「取り組むべき」問題がたくさんあります。わたしよりはるかに多く⁴⁾。実際、フランスの学校で勉強しようと思うなら、事前に相当のフランス語を身につけておくべきです。さもなければ、かなりの時間を浪費することになるでしょう。なぜなら教育課程が外国人向けではなく、本国人のために設定されているからです。こうした大規模な学校では、一人二人の外国人のために通常のコースを変更してくれることなどありえません。エジェ氏がわたしたちのためにいくつか個人レッスンをしてくださるのは、大変な好意なのだと思います。このことがすでに、学内で相当の恨みや妬みをかっていることがわかります。

きっと手紙が短いことをお怒りでしょう。お話したいことは山ほどあるのに、時間がありません。どうかお便りください。そして心にキリスト教徒の慈愛を育んでください！ ブリュッセルは美し

い町です。ベルギー人たちはイギリス人が嫌いです。表面的にはわたしたちより道徳が厳しいように見えます。ハンカチで胸を隠さないでコルセットを着けるのは、ひどくたしなみに欠けるものとされています。マーシーとお母さまによろしく。愛するエレンへ。

かしこ、海を隔てた友より

- 1) Claire Zoe Heger 旧姓 Parent(1804-90) フランス人亡命者の娘。1830年にブリュッセルのイザベル通り32番地で女子寄宿学校を経営。
- 2) Katherine Harriet Wooler(1796-1884) シャーロットがかつて学んだロウ・ヘッドのウラー塾の恩師。
- 3) Constantin Georges Romain Heger(1809-96) 隣接する男子校アテネ・ロワヤールの教師であったが、妻の学校でも文学と修辞学を教えていた。
- 4) シャーロットはフランス語が多少できたが、エミリはほとんどできなかった。

ブランウェルからフランシス・グランディへ¹⁾

1842年5月22日²⁾

君に2, 3行書き送って、気持ちを奮い立たせたい誘惑を抑えられない。僕は独りきりで——家の者は皆、教会だ——人里離れた丘陵に囲まれた古めかしい牧師館に、たった独りで座っている。機関車の警笛がここまで届くようになるのは、僕たちが墓に入ってからのことだろう。

家に帰ってからというもの、病いと痛みに悩まされ、それよりひどい精神的な落ち込みを経験したが、ようやく身体の調子と心の落ち着きを取り戻したところだ。君の知る、僕の名前をもつあの惨めったらしい残骸より、ずっとましなはずだ。今なら、気付け薬にウイスキーを6杯も飲まずとも、僕は陽気に話したり人と楽しく騒いだりできるだろう。僕は決意らしきものをもって書いたり、考えたり、行動することができる。僕が欲しいのはただ、これまでの何年かよりも幸せになるために努力する動機だけなのだ。僕はほとんど狂気としか言いようのない状態から回復していることは感じるが、聴こえるものといったら古い煙突と、さらに古いトネリコの木々のあいだで唸っている風の音しがなく、見えるものといったら、僕がまだ人生に期待こそすれ何も後悔などすることのなかった頃に歩き回ったヒースの丘くらいしがなく、話す相手といったら、二千年も前に塵に帰ったつむじ曲がりのギリシャ人やローマ人というわけなのだから、さっぱり意気が上がらない。それでもこの静かな暮らして——その対照的なことから、ラデンデンフットでの一年がまるで悪夢のように感じられる。あの卑しき不始末——有害で、しかし冷え冷えとした放蕩——をもう一度するくらいなら、この手を切られた方がましというものだ。地獄に墮ちることなく精神が肉体をどこまで運び去れるかを測ろうというのが、あの頃の僕の行動の意味だった。僕が本当に好きだったものはすべて失われてしまった。そして感傷に耽ることに慰めを見いだしている。それが僕の性格の欠点というわけさ。

そうした破滅的状况からの立ち直りの早さは、僕がまだ役に立つものをいくらか残していることの証明だと信じる。とはいえ、あまり長いこと独りでいるべきではないだろう。世間というやつは、別れを告げた者のことなど、たちまち忘れてしまうものだから。病める心には安静は素晴らしい治療だが、快復した患者に薬を与えつづけるのはよくない。

まず、何か仕事の口はないものだろうか。外国の鉄道でも構わない——ロシア、スウェーデン、ベルギー、フランス、サルデーニャ王国でも——イギリス人技師の下で、次に述べるような資格

を有していれば、この僕にも務まるような。

一通りの紳士教育——フランス語を多少たしなみ、絵画にも幾分の心得あり、図面の作成および帳簿つけ、もしくは戸外での作業を含む。

立派なお歴々からの必要数の推薦書あり。

給与額の保証が必要。

- 1) Francis Henry Grundy (1822年生まれ?) ユニテリアン派の牧師 Rvd John Grundy(1782-1843) の息子。鉄道技師。1840年代にヨークシャー鉄道の敷設に携わり、当時、ラデンデンフットの駅長をしていたブランウエルと知り合った。
- 2) ブランウエルによるグランディへの本手紙および次の手紙 (1842年6月9日付け) は、Juliet Barker, *The Brontes: A Life in Letters*(Viking, 1997) による。

ブランウエルからフランシス・グランディへ

1842年6月9日

君の手紙を読んで感じたかもしれない落胆も、その優しく思いやり溢れる口調で和らげられた。しかし現在の状況では、鉄道関連の仕事に関して楽天的な希望を抱いていたとしたら、僕はとんだ馬鹿者だということだろう。あの市場は大変な供給過剰であることを認識しないわけにはいかない。

僕はただ、フランスなどで需要が多いのに鉄道が少なく、敷設が考慮されていることから、外国ならば仕事があるかと思ったのだ。

君は言う、別の方面に眼を向けてはと。そうしてみたものの、我が知り合いの多く、身近な人たちは牧師であったり、この騒がしい世の中から隠遁していたりといった具合だ。教会については、僕には説教壇に鎮座する精神的な資質——偽善ぐらいはあるがね——に欠けている。

ジェイムズ・モンゴメリさんと文人らしいもうひとりが、ぼくの「頭の産物」のいくらかを近ごろ目にして、文学の方面はどうかというわけで、助言とほめ言葉をどっさり呉れた。これは大いに結構だが、僕にうぬぼれはないし、あるのは身体を動かしたいという希望だけだ。

[1842年7月?]

[ブリュッセル]

愛するエレン

もう手紙を書いてくれる気持はないものと、本気で思いはじめていたところです。でも、非難するのはやめましょう。お便りありがとうございました。

9月に帰国するかどうか、わかりません。エジェ夫人がわたしとエミリにもう半年いてはどうか——英語の先生を解雇し、代わりにわたしを採用し——エミリについては一日何時間か、数人の生徒たちに音楽を教えてもらってもよい——と仰ってくださいました。そうすればフランス語とドイツ語の勉強を続けられるうえ、宿舎費も免除されるのです——給料まではいただけませんが。これは親切な申し入れで、ブリュッセルのような他人のことなど構わない大都市では、そして90人の生徒(寄宿生と通学生を合わせて)を抱えている、こんな大規模で他人のことなど構わない学校では、これはありがたく思わなければならないことなのです。お受けしたいと考えています——どう思いますか。

あなたのお便りにはいらいらしてしまいます。その意味するところの半分くらいしか推測できませんし、推測するとかえってすべてを知りたくなるのです。すぐにお便りくださって、説明していただくかなければ。

たまにイギリスに帰りたいとか、東の間ホームシックにかられることもないわけではありません。でもこれまでのところ、かなり頑張っています。こちらでは幸せにしています。いつも自分の好きなことに追われているのですから。エミリはフランス語、ドイツ語、音楽、絵画にめきめき上達しています。エジェ夫妻は、すこし変わったところのあるエミリの秘めた才能に気づきはじめています。

ベルギー人の国民性をこの学校の大部分の生徒たちから類推できるとすれば、それはきわめて冷淡で利己的で動物的で愚劣ということになりましょう。おまけに恐ろしく反抗的なので、教師にとっては扱いにくく、道徳心は腐りきっています。わたしたちは彼女たちとつき合わないようになっています——造作もないことです——プロテスタントのイギリス人という烙印を押されているわたしたちにとっては。

プロテスタントがカトリックの国に住むにあたって晒される危険——転向の誘惑——についていろいろ言われますが、カトリックになりたいなどと世迷言をいう人たちに対して、わたしならこのように助言します。海をわたって大陸に行き、しばらくの間きちんとミサに出て、その馬鹿げた儀式を目のあたりにし——聖職者たちがおしなべて愚かしく物欲につかわれている様を自分の目で見よ。それでもなおカトリックが愚劣で幼稚なおまじない以外のなものでもないと思わなければなら、さっさとカトリック教徒になってみたらよいというだけです。メソジストも非国教会もクエーカー教も、その他の過激な高教会も低教会も、いずれも馬鹿げているとは思いますが、なかでもローマ・カトリックは群を抜いています。

同時に言わせていただければ、カトリック教徒のなかにも——聖書が謎だという人に対しても、多くのプロテスタントたちよりも——キリスト教徒として、ずっと親切にしてあげる人もいるということ。

お母さまとマーシーによろしく——身は遠くにあっても、心は近くにあることをお信じください。

メアリ・テイラーからエレン・ナッシーへ

1842年7月？

[ブリュッセル]

あなたがお手紙の前半に腹をたて、完全に破り捨ててしまわなかったことは幸いでした。そうしていたら、かなりの部分を失っていたでしょうから。

ある判読できない場所に住んでいる夫人のお嬢さんで、イザベラ・シンプソンという非常に優れた女性が当地にいらっやいます。しかし彼女はこの地を離れ、もう二度と会えないだろうと思います。読書についてのあなたの意見ですが、手に入ったものは何でも読むというのは正しいと思います。自分を高めることは、良い本から引用した良い言葉を詰め込むことではありません。良い人たちとだけ生活することなど不可能ですし、良い本だけを読むこともできません。ですからあなたは、本であれ、言葉であれ、行動であれ、あなたの前に現れるものすべてについて、自分で判断する習慣を身につけなければなりません。まず手始めに、たまたま読んでいるこの手紙についてはいかがでしょう。一方の性がもう一方の性に勝っているというあなたの意見には、ふたつの間違いが

あります。まず、本で学ぶことが優越しているわけではありません。その証拠に、ほとんどのことに関して、わたしにはあなたのお兄さんのジョシュア¹⁾より、あなたの意見の方が受け入れられます。彼がわたしとあなたを合わせたくらい、さらにシャーロットの分を少し加えたくらい、たくさんの本を読んでいることは確かですが。

シャーロットがいてもあなたの気が晴れるわけでないことは、彼女からの手紙でおわかりでしょう。わたしは何よりあなたのために気の毒に思います。わたしもできるだけ早く彼女の例にならって、あなたの忌々しい「故郷」(わたしの、でもありますが)に、永遠にさようならを告げられたらいいのですが。わたしがふたたび帰ったら、石ころたちは別の顔を見せるでしょう。古い顔を向けるようなことがあれば、徹底的に打ちのめしてやります。ただしエレン・ナッシーだけは例外です。あなたはどんな顔でも好きなようにわたしを見ていいのよ。それからナッシー夫人、コックヒル夫人、ハナ、それに——わたしが金持ちになったら——その愛情を買い取ることのできるバーストールの教区の人々すべて。

偉大なる雷神(ケーケルベルグの表現でジュピターのこと)の名において、いったいどこであなたはニュージーランドの説明を見つけた、あるいはかすめ取ったのですか²⁾。かの国のことなど、わたしはまるで知りませんでした——と——って、ニュージーランドについて詩的に熱狂的に語る妨げにはなりません——もしそういうことなら、それをわたしの本のどこで読んだのか、あるいは少なくともわたしがそんな夢を見た夜がいつだったのか、教えて下さい。

ニュージーランドではなくドイツはいかがですか。あちらも素敵で未開なところと聞いています。こちらにいる数人は馴染んでいますが、それでも野蛮な習慣、たとえば口を開けたまま食べるとか、自分の場所を確保するためにテーブルにひじをつくとか、ペチコートに17枚も(まあそれくらい)着るとか、たとえ自分が損をしても馬鹿正直に本当のことを言うといった具合です。分別あるはずの我われイギリス人たちが真似ようとしている、こざかしいフランス人男性や上品ぶったフランス人女性たちとは違います。フランス人たちは礼儀作法を練習する、つまり嘘をつくのです。かれらの中でほんとうに賢いものだけが真実を知っているのですが、かれらはそれを言わないよう、くれぐれも注意するというわけです。雷神よ、わたしは何を書いているのでしょうか。

さようなら、愛するエレン。毎日会えていたときよりも、わたしには身近なくらいです。

メアリ・テイラー

1) Joshua Nussey(1798-1871) エレンの兄で牧師。

2) メアリの弟 William Waring Taylor は、1841年11月7日にニュージーランドに上陸し、翌42年4月にウェリントンに着いた。メアリが兄から便りをもたらしたのは1842年7月になってからである。

メアリ・テイラーからエレン・ナッシーへ

1842年9月24日直前

[ブリュッセル]

親愛なるエレン

あなたへの手紙を、ジョーに託しませんでした。彼の滞在中、他に2通書かねばならず、時間がなかったのです。でもありがたいことにジョーが帰り着くより先に、この手紙があなたに届きそうです。彼がどこをどう回っていくか、見当もつきませんから。

時計の鎖をありがとう。必要になったら、使わせてもらうつもりです。その時のために、いつで

も準備しておきます。今使っている時計に小さな穴を開けようかとも考えています。そうすれば早くこの鎖が使えますもの。

それからお手紙ありがとうございます。古い友の懐かしい心温まる英語の表現を見いだしました。こちらにもよい表現がたくさんありますが、わたしはあまり試していませんし、さほど真心のこもったものとも思えません。

ケーケルベルグの楽しみや利点についてあなたが思い描いている絵に、これからわたしの言う色を塗ってください。それは底知れない嘘です。（例外はありますが）生活がわざとらしく、他愛のない、あるいは自然な喜びでも、それを心から楽しむことができません。まわりの連中の虚偽を、こちらも疑われているのがよくわかります。でも、わたしは余所に行くのですから、文句など言ってもむだなこと。行くのです、ドイツのど真ん中に。イサーローンという場所の近くに。一日中旅して回っても、イギリス人はひとりもいませんし、フランス人もいないだろうと思います。山々の木や湖がたくさんあるでしょう。そして英語を教えられる子どもたちもたくさんいてくれればいいのだけれど。どうしてこんなことになったのか、あちらに着いてから話します。ケーケルベルグでお嬢さんが勉強しているマダム・シュミットというドイツ人の婦人に、冬のあいだ招かれているのです。ですから凍え死ぬようなことはないでしょうが、暖かくなったら自分でやりくりしなければなりません。シャーロットとエミリは元気です。身体ばかりでなく、心も、そして希望をもつということでも。彼女たちは現在の立場で満足し、楽しんですらいます。イギリスに戻らないのはもっともだと思えます。少なくとも一人はブラッドフォードという美しい街で、現在よりもっと良い給料をもらえるというのに。

ふたりの決心について、まともな理由ばかり書いてすみません。フランス語で講義を聞きながら、その一方で英語で手紙を書いているのです。それに、なぜ彼女たちが正しいか、理解あるいは感じられなければ、あなたにわかってもらうことはできないでしょう。趣味と感情の問題です。あなたは現在の場所に閉じこめられているように感じているので、彼女たちが籠の外にいる——少し寒いけど——ことがなぜ正しいか、おわかりにならないでしょう。

寒かろうと暖かろうと——ごきげんよう。わたしは眼をつぶって、冷たい水に飛び込むつもりです——ふたたび浮かんできたら、どんなようすだったかお話しするわね。

メアリ・テイラー

P. B. ブロンテからフランシス・H・グランディへ

1842年10月25日

〔ハワース〕

拝啓

まちがない。僕は親友のひとりウェイトマン師の死の床¹⁾で長いこと看取り、そして今、20年間ばくの母親であった伯母の死の床²⁾に付き添っている。伯母は数時間のうちに息絶えるだろう。

姉と妹たちは家から遠く離れているので、いろいろなことが僕にかかってきた。これらのことが、君の我々に対する友情を心ならずもなおざりにした言い訳になるにちがいない。

君にばかりでなく、ジェイムズ・マーティノウ師³⁾にも書きたいと思っていた。思いやりと真実に溢れた批評に心からの謝意を表して——褒めちぎられるばかりで、助言は少なかったが——だがまず何より、悲しい儀式を済ませねばなるまい。ステイーヴンソンさん⁴⁾にくれぐれもよろしく伝えてほしい。そしてこの殴り書きを許してもらいたい。涙で眼が霞んでよく見えないのだ。あ

まり幸福でない、しかし感謝している友人にして僕^{しもべ}より。

P. B. ブロンテ

- 1) Weightman は2週間の闘病生活の後、9月6日に死亡した。
- 2) Elizabeth Branwell (ブランウェル伯母) は、4日後の10月29日に死亡した。
- 3) Revd James Martineau(1805-1900) ユニテリアン派の牧師。Harriet Martineau の弟。John Grundy の同僚。ブランウェルは作家、書評家としても活動していたマーティノウに、自作について意見を求めたものと思われる。
- 4) George Robert Stephenson(1819-1905) 鉄道技師。蒸気機関を発明したスティーヴンソンの甥。グランディの友人で、マンチェスター・リーズ鉄道で働いていた。

P. B. ブロンテからフランシス・H・グランディへ

1842年10月29日

[ハワース]

拝啓

真の友を失いたくないので、君の手紙の調子とはあえて反対に書こう。死のせいで、僕は君の親切さえ感じられなかった。このところ僕はうんざりするほど死を経験したものだから、この世あるいはあの世の陰鬱な光景ばかりを僕が描いても、君の姉さんは大目に見てくれるだろう。自分でも支離滅裂だと思うが、僕は自分の最大の敵にさえ味わせたくないような激しい苦しみを二晩も見つけたのだ。子どもの頃の幸福な日々への案内役を、僕は失ってしまった。ハワースで君に会ってから、たいへんな悲しみを味わったものだから、今ではインドで戦つていようと¹⁾・・・だろうと構わないくらいだ。なぜなら気持ちが滅入ったときは、危険こそ最高の特効薬なのだから。しかし君が不吉な物言いを嫌うことはよく知っている。ただ僕の二通の手紙から、君を忘れていないことをわかってくれるよう願うばかりだ。

敬具

[P. B. ブロンテ]

- 1) インドは1839年にアフガニスタンと国境紛争となり、1841年にイギリス軍部隊がカブールで全滅した。

メアリ・テイラーからエレン・ナッシーへ

1842年10月30日及び11月1日

[ブリュッセル]

親愛なるエレン

今頃までには可哀想なマーサの最期¹⁾について聞いているでしょう。わたしの頭はこのことでいっぱいですが、何も言うべきこともなく、というか言う気になれないのです。なぜ、あなたに手紙を書くのか、自分でもよくわかりません。でも何よりこの度の不幸で、あなたのことを忘れてしまうなどと思わないでほしいのです。郵便料金を払わずに手紙を送る機会を得ましたので、あなたのことを思っていると伝えるために書いています。マーサの病気の経過を知りたいとお思いでしょ。数カ月してもまだ聞いていなかったら、その時にお話しします。それまではお許しいただかなければなりません。あのときの状況をごく細部にいたるまで、数え切れないほど振り返ってみましたが、

苦痛を覚えずに整然と説明することはできません。何も後悔することはありませんし、取り消したいこともありません。マーサのことでさえ。あの娘は今の場所にいるのがいいと思います。それでも彼女の魂を清めた苦難を思うと、胸が痛みます。どうしようもないのです。楽しかったこと、悲しかったこと、ありとあらゆる事が、あの娘のことや彼女の体験を思い出させるのです。

今日（10月30日、土曜日）の午後、シャーロットとエミリと一緒に、プロテスタントの墓地まで散歩することになっています。彼女たちに会うのは久しぶりで、たがいに話したいことが山ほどあります。わたしは今、ブリュッセルのディクソンさんの家²⁾に滞在しています。かれらはわたしが想像していたのとはだいぶ違うことがわかりました。あんなに強い絆で結ばれた心優しい家族を知りません。わたしを家族の一員として受け入れ、わたしがここに一生暮らしたいと思うような居心地のよい家庭を作ってくれています。

ここで暮らそうと思えば、それは可能なのです。ドイツに行きたいとか、ハンズワース³⁾に住みたいというへそ曲がり（そのことでは、わたしたちはとても一貫しています）さえしなければ。けっきょくドイツに行くことにしました。活動することが精神、健康、利益の点から、もっとも望ましいと思います。手紙を仕上げるのは、シャーロットに会ってからになるでしょう。で、彼女とエミリに会いました。私たちは6マイルほど散歩して、墓地と周囲の風景を眺めました。その後、いとこたちと楽しい夕べを過ごし、叔父とエミリがいたので、ひとは全然しゃべらず、もうひとりも一言二言しか話しませんでした。そちらの様子を知らせてください。お便り、嬉しかったわ。マーシーとお母さまに、それから人がわたしのことを尋ねたら、よろしくお伝え下さい。好奇心というより、親切心から聞いていると思つたらね。ミス・コックヒル、メアリ、ウラー先生の全員、とくにミス・ウラー、ミス・ブラッドベリー、ヘルズ家の皆さんによろしく。

メアリ・テイラー

リージェンス通り11番地

1842年11月1日

もしこの手紙が期日を過ぎてもしばらく届かなかったなら、それは途中で遅れたというよりも、個人の手でもっと早く運んでもらう機会がなかったということです。

メアリ・ディクソンが、あなたとお姉さまによろしくのことです。

1) マーサ・テイラーは10月12日にコレラで死亡した。

2) Abraham Dixon(1779-1850) メアリの叔父。ブリュッセルに居住しており、マダム・エジェの学校からも近かったため、シャーロットたちも訪ねている。

3) メアリの兄ジョンとジョシュアの住む Hunsworth Mill の近くの村。ゴマソールから1マイルの距離。

コンスタン・エジェからブロンテ師へ¹⁾

1842年11月5日

[ブリュッセル]

拝啓

実に悲しい出来事のために、お嬢さま方が突然、帰国されることになりました²⁾。私どもはこの出発を大変残念に思いますが、それも致し方なきことと認めております。彼女たちがご家族に合流して、天がお取り上げになったものをお慰めしようというのは自然なことです。天があなたにお与

えになったもの、そしてまだあなたの元に残しておられるものを、より進んで感謝できるでしょう。このような機会に便乗して、こうしてご挨拶することをお許し下さい。拝顔の榮譽には浴しておりませんが、あなたに深い敬意を寄せるものです。子を見てその父親を判断するかぎり、間違いはなからうと思います。この点において、お嬢さま方に見られる教育と意見から、あなたが立派なお方であろうとの強い確信を抱くものです。お嬢さまたちがあらゆる科目において実に目覚ましい進歩を遂げていることをお聞きになれば、必ずやご満足いただけるものと思います。この進歩はもっぱら彼女たちの向学心と忍耐のたまものであります。こうした生徒たちの扱いに、私どもはほとんど手がかかりません。彼女たちの進歩は我われというよりも、あなたがたの手によるものであり、彼女たちに時間や勉強の価値を教える必要はありませんでした。彼女たちはお父上の家にあるものはすべて学んでおり、私どもはお嬢さま方の努力を導き、お父上の模範と勉強から得た賞賛すべき活動を啓発する適当な材料を与える、というささやかな手柄を持つのみであります。お嬢さまたちへの我われの正当な賞賛が、今あなたを苦しめている悲しみの中でいくばくかの慰めになりますように。あなたに、そしてミス・シャーロットそしてミス・エミリにお便りする我われの希望であります。それが彼女たちの努力に対する、純粋な報酬であります。

大切な生徒2名を失うことで、私どもが大きな悲しみと不安を感じていることは隠せません。私たちが残念に思うのは、この突然の別離が、彼女たちに捧げてきたほとんど父親的な愛情を断ち切るものだからです。そして私たちの不安は、やり遂げていない仕事がたくさん残っていること、うまいスタートを切った多くの事柄、完成するにはもう少しの時間が必要な事柄がたくさん残されています。一年もすれば、どちらのお嬢さんも、将来のあらゆる不測の事態に向けて十分な準備ができるでしょう。ふたりとも知識を深め、教授法を学んでいます。ミス・エミリはピアノを学ぶはずでした——ベルギーで最高の先生³⁾からレッスンを受けることになっていたのです。彼女自身、すでに小さな生徒たちの指導に当たっておりました。その結果、まだ知らなかった部分が少なくなり、さらに憶病さの名残も消えようかというところだったのです。ミス・シャーロットはフランス語を教え始め、指導に不可欠な自信と冷静さを身につけ始めたところでした。長くてあと一年あったら、勉強は完了、すっかり完了していたでしょう。そうすれば、よろしければ、お嬢さまたちのいずれかあるいはどちらにも、然るべき職場を提供できたでしょう。そしてそれは若い女性にとっては得難い貴重な自立を与えることになっていたことでしょう。おわかりいただけますように、これは私どもの利益の問題ではなく、愛情の問題であります。お父上に向かってお子さまのことを申し上げ、まるで私どもの家族のように、その将来について心配することを、お許し下さい。ただ彼女たちの資質、向上心、熱意を思うあまり、あえてこのようなことを申し上げるのです。勉学を完全に止めてしまうことが、お嬢さんたちの将来に及ぼす結果については、私どもより遙かに慎重、かつ賢明なるご判断を下されることと存じます。何をなすべきか、ご決定ください。また私どもの率直さをお許しください。私たちがまったく私利私欲のない愛情を動機としていることをご理解いただけますように。私どもの愛情がもはや無用となれば、大変悲しく思います。

敬具

1) シャーロットとエミリが帰国する際にエジェ氏から託されたもの。

2) ブランウェル伯母 (Elizabeth Branwell) が10月29日に死亡。シャーロットとエミリは危篤の知らせに急いで帰国したが、臨終には間に合わなかった。

3) エジェ氏の最初の妻の義理の兄弟 Mr Chapelle のこと。ブリュッセルの音楽院の教師。

〔1842年〕11月10日

ハワース

愛するエレン

お便りが届いたとき、わたしはまだイギリスには帰り着いておりませんでした。11月2日に伯母の病気を知らせる第一報が入り、ただちに帰国することになりました。翌朝、第2便が着き、伯母の死を知らされました。日曜日にアントワープを出航し——夜に日をついで、家にたどり着いたのは火曜のことでした——もちろん葬儀など、いっさいが済んでおりました。もう伯母には会えないのです。父は元気にはしていました。家にはアンが戻っていました。元気そうです。長らく無しのつぶてだったと言われますが、3週間前にお便りしたのです。この短い便りにお返事を下さったら、もういちど詳しい手紙を書くつもりです。マーサ・テイラーの病気のことは、亡くなる前日まで知りませんでした。翌朝ケーケルベルグに駆けつけ——危篤などとは思ってもよらず——すべてが終わったことを告げられました。夜のうちに息を引き取っていたのです。メアリはブリュッセルに引き取られ¹⁾、いらい時々会っていますが、彼女は今回のことで打ちのめされてはいません。けれどマーサが死の床にある間、メアリは母親にも姉にも勝る存在でした。優しく疲れも見せず妹を見守り、看病し、励ましつづけたのです。今は静かに落ち着いているように見えます。激しく感情を高ぶらせることもなく、おおげさに悲嘆にくれてみせることもありません。マーサのお墓を見届けてきました——異境の地でその灰が眠っている場所を。伯母もマーサ・テイラーも、そしてウェイトマンさん²⁾も、今ではみな故人となってしまいました。何もかも、なんと侘びしく虚ろに見えることでしょう。ウェイトマンさんの病気はマーサとまったく同じものでした。彼も同じくらいのあいだ床につき、同じような最期だったそうです。伯母は内臓疾患で、やはり闘病は2週間でした。

さようなら、愛するエレン

1) デイクソン家 (the Dixons) のこと。

2) Weightman は1842年9月6日にコレラで急死した。

〔1842年11月22日?〕

〔ハワース〕

愛するエレン

ジョージお兄さまがお元気になられ、あなたが四六時中、付き添う必要がなければよろしいのですが。父がよろしくとのこと。短時間でもハワースにお出かけくだされば、大変嬉しいと言っています。この金曜日はいかがですか。急な日程ですが、月曜日にはアンがヨークに向かう予定で¹⁾、帰る前に、ぜひあなたに会いたいというのです。ジョージは優しい方ですから、あなたが出かけることに反対なさらないでしょう。この世にはあまり楽しいことなんてありません。こんなに長い別離の後にふたりが再会することを認めないなんて、あまりにも意地悪というものです。わたしたちが気が滅入ってふさいでいるのでは、というご懸念は無用です。みんないつも通りで変わりありません。昔と変わらぬわたしたちを見いだすことでしょう。すぐにお返事ください。

お母さまとマーシーによろしく。

火曜日・朝

1)ヨークを経由してソープ・グリーンンのロビンソン家に戻るということ。

[1842年11月25日]

[ハワース]

愛するエレン

あなたのご招待が本気であることを願います。お受けしたいと思いますので。お会いしたいです。たぶん2, 3週間のうちに再びイギリスを後にすることになるでしょうから、慎みや儀礼などを気にして、せっかくの機会を逃したくありません。

病人がいるのにブルックロイドに客を迎えるのは不都合であろう、と何かがわたしに告げています。でもそんな言葉には耳を貸しません。けれど月曜日はむりです。現在のアンの予定では、その日は都合がつかないのです。彼女は火曜日の朝6時にハワースを発ちますので、ブラッドフォードに8時半頃に着くでしょう。あなたが馬車で来られるには早すぎるでしょう。

火曜日が不都合なら、ただちにお知らせ下さい。リーズの市の日にぶつかるのは、たぶん具合が悪いでしょう。そういうことなら、あなたの都合の良い日まで訪問を伸ばします。

あなたにハワースに来ていただいた方がよいと申し上げたのは、たくさんの理由があつてのことなのです。けれどもそれを妨げる障害がいつもあるようなので、儀礼も誇りもすべて振り捨て、マホメットではありませんが、歩いて来ない山にはこちらから歩いていくことにします。

乗り合い馬車はボウリング・インに止まります。ブラッドフォードです。

マーシーとお母さまによるしく。

C・ブロンテ

スタンベリーのテイラー夫人¹⁾へ

[1842年12月?]

[ハワース]

ミスターおよびミス・ブロンテたち²⁾は、テイラー夫人およびミス・テイラーに感謝し、天気が良ければ、ご親切なお招きを喜んでお受け致したいと思います。

月曜・朝

1) Mrs Mary Taylor と思われる。Stephen Taylor(1772-1831)の未亡人で、同氏はハワース教会の理事であった。ハワースから1マイルほどのスタンベリーに住んでおり、シャーロットとエミリがブリュッセルから帰国したので、クリスマスに招待したと思われる。

2) アンはソープ・グリーンに帰っていたので、シャーロットとエミリのこと。

スタンベリーのテイラー夫人へ

[1842年12月?]

[ハワース]

水曜・朝

ミス・ブロンテたちは誠に残念ですが、テイラー夫人のご親切なお招きをお受けできないことに

なりました。

友人¹⁾の到着を告げる手紙が届き、その準備のために自宅に留まらざるを得なくなったのです。ミスター・ブランウェルは、都合が着けば、喜んでお招きをお受けしたいとのことでした。

1) エレン・ナッシーのこと。12月末から1月初旬までハワースに滞在した。

(1999年6月10日受理)